



理事会だより (8・12)

一、令和3年度文化の日俳句大会について、第二部実施可否はコロナ感染状況を見極めて慎重に判断したい、と長谷川業務部長から報告。

二、秋の吟行会の申込は現在二十名余り。

三、第3回藤田湘子記念小田原俳句大会のチラシの原稿配布(実施要項は本号8頁)。

四、「俳句の岸辺」につき八月中に完成し協会員に一冊ずつ9月理事会にて配布すると山田編集委員長より報告。

五、令和四年以降の市民文化祭は従来の形(会場確保・補助金等)では行われなくなる旨長谷川文化連盟委員より報告。

・二見和江さん(春野)句集「花きぶし」出版(本阿弥書店)の紹介。

・石原美枝子さん(非会員・寒川)からご厚志を頂いたので「俳句の岸辺」を謹呈することに。

「俳句おだわら」10句抄 (648号より)

小島ノブヨシ 抄出

親族の時に疎まし七変化

見えすいた嘘も方便ラムネ飲む

雨蛙空を眺めて鳴く準備

葉の上が劇場であるかたつむり

軽<sup>か</sup>見八羽急ぐ夕べの川伝ひ

時鳥文書く眼鏡休ませり

終演の時きて色の七変化

逃げる白鷺三島由紀夫の「金閣寺」

夏光して焼夷弾の夷の字かな

蜘蛛の罟の真ん中嘘っぽい話

守屋まち 抄出

みどり児の湯を蹴る力柿若葉

梅雨湿地地蔵の顔に苔の髭

百幹<sup>ひゃくざん</sup>の撫<sup>な</sup>さらさらと立夏かな

張りをへて田水にはやも動くもの

雨上がり初夏の匂いの風となる

老鶯の一声湖の鎮もれる

アイスキャンデー我はおかつぱ兄坊主

古井戸に織部の滑車半夏生

話し相手ほしくて金魚太らせる

泥団子つるつる艶の梅雨晴間

川本 育子

尾崎 一夫

小瀬村信子

木村 和彦

宮崎 悦女

古屋 徳男

澤口 文子

瀬戸 正洋

大石 雄介

杉山あけみ

豊田 幸枝

中野 文子

片野 節子

池田 忠山

二上 光子

石井千代子

大木 敬子

北崎 修

小林永以子

蓑宮 わか

俳句おだわら（8・19メ切り、到着順）

◆鹿火屋（7・30）

虚貝累累白く浜万年青

久江報

足立 和子

梅雨明や送電塔は西へ西へ

川本 育子

浜木綿の象牙の彩や月に映ゆ

高橋 小糸

梅干して夜空の星のかがやけり

山崎 悦子

夏蝶の何か伝言ありさうな

近藤 久江

◆たけのこ（8・4）

杉一本みんみん蝉の一斉に

徳田 公子

古写真凜々しき夫の白緋

三木 泰子

朝採りの痛さも愛でて茄子の刺

久津間百合子

コロナ下の古都の古刹の花手水

小宮 早苗

稗抜くや明るき寡婦の怨み節

宮崎 悦女

◆おほゐ（8・4）

八月や忘れてならぬこと数多

昌男報

梅雨明や泰山木はここにあり

加藤 春江

夏草に埋もれし野辺の地藏様

坂入清四郎

夕風に浸り聞き入る鉄風鈴

瀬戸とみ子

鬼灯の秘めたる野望飛び出でり

高橋みどり

夕風の静かに抜ける冷奴

中津川晴江  
中根登美子

秋夕焼け一日分の陽が匂う

中村 昌男

朝顔のラッパが我に発破掛け

廣田 悦子

若返る教え子からの夏見舞い

二上 光子

爽涼や五輪戦士の片えくぼ

横塚 昌平

八月や鎮痛剤をまた飲んで

石井きよ子

鬼灯や記憶の底に陽の匂い

石井千代子

鬼灯市キリリ売子の豆絞り

小野 菊土

盆花が田んぼの隅で迎えてる

風間 秀泰

◆こよろぎ（8・12）

短小の角を嘆くやカブトムシ

つとむ報

やうやくに日の傾きて草を引く

板谷 雅泉

梅雨明や田圃の匂ひ日の匂ひ

植松テル子

◆香雨・梅ごち（7・25）

海底の魚もおどろく揚火花

忠山報

日の暮を待てずいそいそ庭火花

肥後ちさこ

花火の夜被災の海に手を合はせ

関戸わよこ

漆黒の空を火花に明渡す

青山 典子

家族出そろひつぎつぎと庭火花

門松 鳳文

水底に五輪の影をあめんぼう

吉田 百代

そよりともせぬ河童忌の水辺かな

吉田 康雄

雲の峰箱根の山を吊り上げて

小澤 純子

甲板に鈴生り旅の花火客

池田 忠山

◆沈丁(8・7)

寶子山報

◆零(8・17)

史郎報

秋蝶や原爆ドームにひらひらと

中野 文子

あの日から七十六年原爆忌

青木たけを

秋蝶や何もせぬまま日の暮るる

若村 京子

原爆忌ポテトチップを噛みしめる

木村 和彦

御霊いま何処におはす星明り

柳澤ミサ子

丹沢縦走ひぐらしの鳴く里に着く

野川木一路

秋蝶や石垣崩れ一夜城

田中 恵一

気楽に滑走アメンボの足長い長い

川合 昌子

キリストのゴルゴダの丘秋の蝶

河本 純子

みずすましすいすいすいと歩きたい

井上 良子

前かごの凹みそのまま秋の蝶

瀧本 敦子

戦知らずの呉のすすさん広島忌

佐藤 正子

「最後かも」つぶやきながら梅を干す

勝木 澄子

鉄橋の響きは悲し原爆忌

中村 裕子

秋蝶や吹かるるままの浅葱色

菅野 英余

原爆忌ひとにやさしさ残忍さ

伊藤 道郎

門前で桃売る人の妣に似て

高井 幸子

自分史を校正すれば真葛原

岡本 史郎

祈ること多き八月人恋ふる

片野 節子

◆実のり(8・12)

たか志報

秋の蝶寂しくなんかありません

寶子山京子

秋の雷丹沢山塊そそり立つ

岩本ひさみ

◆青梅(8・4)

幸子報

古代蓮纏ふ古代の色香かな

杉本 久子

炎天の中を生きぬく八十路かな

大塚 行人

涼新箱提灯の駄明し

木村 幸枝

かはたれを花火の客の下駄の音

神野美代子

普請場の釘打つ影や大西日

新井たか志

葉たばこの軽便鉄道夏の果

湯本とし子

◆みなみ(7・17)

かほる報

夏萩やはんなり返す京ことば

加藤まり子

透きとほるものへ箸ゆく夏料理

加藤 健治

初もずや終日富士の見える里

久保寺トミ子

ふっきたれたように立ち去る黒日傘

飯田 愛

しきたりは省略をして盆支度

田渕 令子

窓越しに毎夜守宮はあいさつし

小瀬村信子

海の香を盛る平皿や夏料理

田中 幸子

みくじ吉汗忘れいる最乗寺

加藤れい子

ストレスは青田の波に宥められ

加藤 富江

青田風心の皺を伸ばしけり

豊田 幸枝

見つめられマネキン少し汗ばみぬ

市川めぐみ

汗ひいてしばしひとりの夕心

齋藤 静

生きるとは口を開くこと燕の子

加藤かほる

◆春野(7・18)

きよ志報

一斉に蟬鳴く誰か死ぬるかに

瀬戸 悠

長生きも楽ではないぞ青蛙

尾崎 一夫

老いてなほなかなか会へず道をしへ

二見 和江

玉虫の羽根はみどりに太古より

秋山 昇

浮草のそよりともせぬ夕まぐれ

伊藤はる子

鍋一つ焦げつきとなり朝曇

内田知江子

ストローを吸えばすいすいと夏

長谷川きよ志

◆山北(7・29)

由里子報

十葉の八重咲く庭のティータイム

和田恵美子

大作の墨の濃淡日雷

尾崎 幸子

巻きもどす師の文の香や半夏生

中山 妙子

開幕のベルを鳴らして梅雨明け

尾崎 竹詩

パリパリの春巻きの皮夏休

石田加津子

飛び立つような指揮者の背中夜半の夏

竹下由里子

◆鷹(8・6)

十五報

土地の子に背丈抜かれぬ避暑の宿

青木 孝子

洗い髪束ねし衿の細さかな

池田 令子

昼顔の籬まきや長啼く牧の牛

西賀 久實

七月や卓のラジオの喋りづめ

佐宗 欣二

裏返し洗ふジーンズ巴里祭

須田 晴美

車より早苗下ろすや雨ぼつり

中田 笑子

尊徳の治水の岸や瓜の花

百川 秀子

紙魚はしる祖父の描きし紙芝居

山崎美知子

道端に立つ子しゃがむ子冷し瓜

庄司 下載

夕顔や泣けない姉は奥歯嚙む

瀬戸 りん

石庭の雄松雌松や風涼し

高橋久美子

切り取りしレシピの数や秋近し

中山智津子

能楽堂出でて日傘をひらきけり

齊藤 桂

石花せのうみ海へ進む船団土用東風

芹澤 常子

炎日の黙禱に耳しんと開き

島 梅乃

通り雨蛍袋の二番咲き

山口安規子

駄弁の鱈の押鮎二人分

大木 敬子

浴衣着て一重瞼の姉妹

大島美恵子

盛夏なり右腕の投手左打ち

北崎 修

まひまひの殻に右まき左まき

田下 昌人

水甕に増えて緋目高白目高

中根 和子

旧姓を呼びあふ集ひ百日紅

木洩れ日の歩歩の岩場や小雀鳴く

晩涼や小面はづす舞台裏

髪切つて足の軽しや七変化

修験者の上る石階杉落葉

夏藤や今日も散歩のペアルック

紙魚走る結婚式の芳名帳

父と見る恐竜図鑑夏休

手花火や庭にうちの子隣の子

摘む茄子の牛に程よく曲りけり

朝顔や企業戦士の靴の音

黒日傘ベンチにねかせ樹木葬

回覧の訃報続けり稲の花

今朝の秋雀の声の庭に散り

星月夜おどろおどろと波の音

◆草むら(8・19)

受け継ぎし名の無き墓や墓参

茄子も育て卒人生も如何かな

丹沢山塊五体投地する晩夏

宙を舞う美しき筋肉夏季五輪

◆無所属

市川 好子

加藤 幾代

高橋 正子

守屋 まち

米山 翠

來田 新子

大沢 年子

片野 秋子

小林 環

近藤 絢子

下平 美子

杉崎 せつ

鳥海 壮六

古屋 徳男

村場 十五

重満報

石井 秀稀

井上 和子

佃 悦夫

佐々木重満

魂送り水平線をこゆるまで

古団扇峡に残りし屋号かな

七月尽網戸についた外れぐせ

新涼やカフェに語らふ老姉妹

百一才甘酒飲んで平やかに

蛇穴を出るアナログ思考捨てきれず

犬も来て木の下混見合ふ大夕立

天の川古女房を付添わし

瞳めく少女の鏡晩夏光

盆踊り阿保阿保と哀しけり

ワクチンの夏白一色のクリニック

桃剥いて地球の水をしたたらす

ひとことこのやうにままこのしりぬぐひ

梅雨明けはまだか卵に黄身ふたつ

秋立てり土に分け入る考古学

鯛や噂に耳を持たずして

「カリ」つと踏んでしまったかたつむり

包丁苦勞するパイナップルの輪切りかな

乳飲み子のつかまり立つやアツパツパ

炎天の飛行船さらに飛行船

翻筋斗もんどりは打つものである天の河

小林永以子

一ノ瀬茂代

出澤 洋子

澤口 文子

鈴木久美子

北村 文江

木村美千代

岩楯恵津子

須田 聡子

穂坂志げる

山田 照子

田畑ヒロ子

小島ノブヨシ

杉山あけみ

山口 千代

小澤 園子

岡田 典代

瀬戸 正洋

蓑宮 わか

大石 雄介

大石 和子

## 池田 令子

(令和3年7月号)

蜘蛛の罟の真ん中嘘っぽい話

杉山あけみ

喫茶店の窓際の席にいる男女。男は饒舌に何かを語り、女は無言で雨上がりの窓の外を見ている。目の前の木に蜘蛛の巣が張られ、蜘蛛は葉陰にでも隠れているのか姿はない。巣の中心の後ろから夕日が差し込んで糸についた雨粒を光らせている。私には掲句のような取り合わせはなかなか詠めないから思いもよらない感覚の句に出会うとつい、いろいろな景を浮かべて楽しんでしまう。

## 尾崎 一夫

(令和3年7月号)

夏光して焼夷弾の夷の字かな

大石 雄介

俳句は恐ろしい。この句を詠んで、私は国民学校五年生に戻った気がしました。真暗闇の灯火管制の下、警戒警報発令、しばらくして空襲警報にかわり、間なし照明弾落下、そして音をたてて雨霰の如く焼夷弾が降ってきたこと……忘れることの出来ない光景です。そんな最中、隣りの御主人は金庫の上に落ちて来た時限爆弾の破裂で死亡しました。残されたのは奥さんと二人のお嬢さん。

原爆、終戦の句はよく見かけますが、こんな身正に感ずる句ははじめてです。将に夏光、将に夷です。

よく平和惚けをしているとか云われます。忘れてはならないことへの警鐘の一句とつくづく感じました。

## 菅野 英余

(令和3年6月号)

電線を辿ればフクシマ燕来る

岡本 史郎

燕。今年も巣立つたばかりの小燕が電線に並んでいた。親は最後の給餌を繰り返す。素敵な自然界の営み。フクシマ。災害の多発する現代社会。ややもすると忘れがちな十年前。廃炉作業、戻れない古里、健康への不安、除染廃棄物。フクシマは手探りの現在進行形。頑張れフクシマ。

私は秋に福島を訪れる予定で、久しぶりに友達と会えそうです。

## 湯本とし子

(令和3年7月号)

大揺れに雲かきまぜて今年竹

高橋 小糸

老鶯が鳴き、ところどころには山百合。それを背に古竹、今年竹の群生している風外窟。杉林の中をもっともせず元気良くしなっている竹は、生の象徴でもあり、地球の希望にも見える。そしてそれは風外窟だけでなく日常どこにもあり、見むきもされないのに、夏の陽気さと雲をかきまぜる途轍もない元気さを与えてくれる。やさしく清々しい秀句です。元気になれる物があれば人は熱くなれる。

高橋 正子

あぢさゐや狭庭に日暮とどこほる  
朴葉味噌われには辛し宿浴衣  
山鉾の曲りて来たる日照雨  
見つけたる湯元の匂ひ黄菅原  
白靴や先は干潮夫婦岩

片野 節子

螢火や小耳にはさむ介護術  
働いて来た手であける缶ビール  
這ひてくる兎の一途なる夏座敷  
白雲や捨てると決める登山靴  
思ひふくるる少女の詩や沖縄忌

石井きよ子

軒先をいまわりして燕去ぬ  
閉店の文字を飲み込む朝顔よ  
合わせ鏡出口の見えぬ秋の蝶  
一粒に漲る幸や葡萄食む  
干柿や持続可能な里の知恵

青木 孝子

提灯に頭ぶつけて踊の輪  
新米に畑のもの添へ峡の店  
新蕎麦や借景に置く穂高岳  
稔り田やとんがり屋根の喫茶店  
わが夜長五大家族の時遠し

吉田 康雄

城壘の崩れしままに蔓珠沙華  
西行の愛でしこの沢秋茜  
秋暑し貨物列車のきしむ音  
小流れを蜻蛉ゆきかふ夕まぐれ  
ひとところ夕日に映えて天守閣

二上 光子

うららかや会う人ごとに花談議  
風を吸い夢を吸い込む鯉のぼり  
七千歩五月の風を友として  
青空を独り占めして樟若葉  
雨上がり初夏の匂いの風となる

野川木一路

原爆忌季語をかみしめ手紙書く  
手を上げてバスを止めるや秋の里  
郵便車ひぐらしが呼ぶ森に消え  
巡礼のまるき背中や秋気澄む  
秋麗や暮初む村の友訪ね

中山智津子

暮れ残る富士やテントの掛ランプ  
断層の横ずれあげは纏れけり  
朝焼のカルデラ台地馬磨く  
富士山へ翼端の灯や洗ひ髪  
落蟬の暴れ鳴きせる売地かな

### 第3回藤田湘子記念小田原俳句大会

作品募集（一般の部）

募集期間 令和三年九月一日～十一月三十日

出句 自由題二句一組（何組でも可）

投句先 小田原市図書館内 俳句大会実行委員会

小田原市南鴨宮一丁目五―三〇

※小田原市ホームページから電子申請も出来ます。

投句料 一組千円（郵便振替 加入者名

「藤田湘子記念小田原俳句大会」

〇〇一〇〇一八一―二六四五三四

※投句の際振替受付票のコピーを同封して下さい。

賞 大会賞五万円 市長賞三万円 鷹俳句会賞

小田原俳句協会賞 各選者賞等

（小中学生の部）もありますので募集チラシでご確認下さい。

俳句大会（一般・小中学生）

日時 令和四年四月十六日（土） 十二時三十分開場

第一部 小田原市民ホール開館記念・特別講演会

（十三時三十分）

講師 黛まどか氏「歩行から生まれる思考」

第二部 俳句大会表彰式（十四時三十分）

選者（小中学生）高柳克弘（鷹編集長）

（一般）小川軽舟（鷹主宰）奥坂まや（鷹同人）

池田忠山（小田原俳句協会会長）長谷川きよ志（同

副会長）山田照子（同副会長）

会場 小田原市民ホール（小田原三の丸ホール）大ホール

小田原俳句協会

〒二五〇一〇〇二二 小田原市本町二―一三―二

池田 忠山方

### 令和3年度小田原文化の日俳句大会

第二部 俳句大会

日時 令和三年十一月三日（文化の日）

会場 小田原市民交流センター（通称UMECO）

受付 十二時 投句締切 十三時

開会 十三時半 終了 十五時半（予定）

整理費 五百円（呈飲み物）

当日題 秋季雑詠二句 総互選

賞 小田原俳句協会賞以下五十位

### 秋の吟行会のお知らせ

日時 令和三年十月十日（日）

会場 小田原フラワーガーデン 小田原市久野

三七九八一五 ☎〇四六五―三四―二八一四

受付 十三時～十三時三〇分 当日囁且三句を短冊にて

会費 五百円（賞品・参加費などに充当）

句会 十四時より総互選 \*会場は食事不可のため、

各自吟行、食事を済ませて会場へお越し下さい。

参加申込・電話又は葉書にて九月三十日まで

〒250・0854 小田原市飯田岡四八一―三三

岡本史郎宛 ☎〇四六五―三八―二八二八

◆愉悦夫名誉会長著「俳句の岸辺」購入を希望の方は、

山田照子副会長（☎〇四六五―三四―六五四二）へ

お申込下さい。（有料）